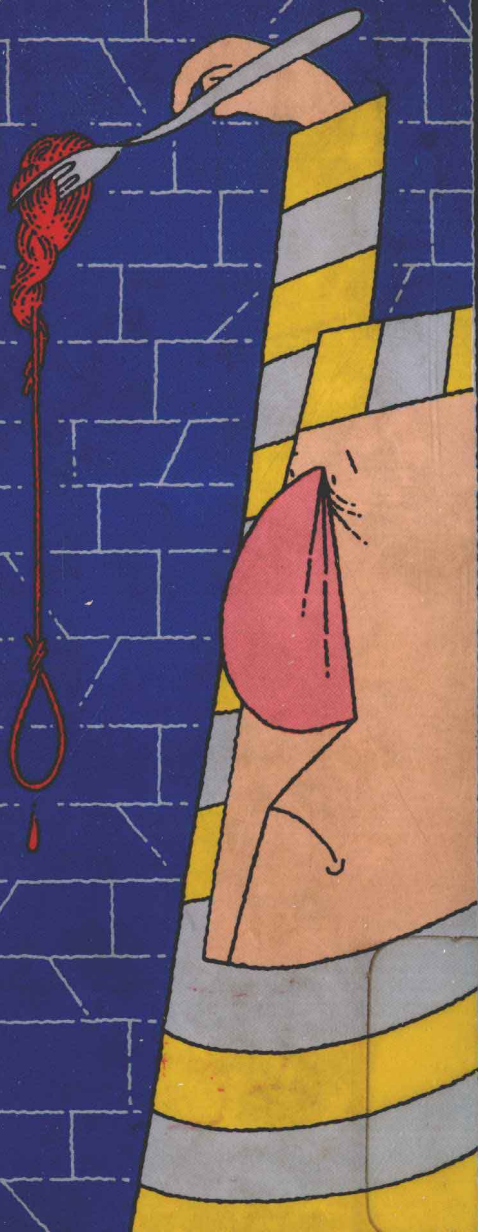
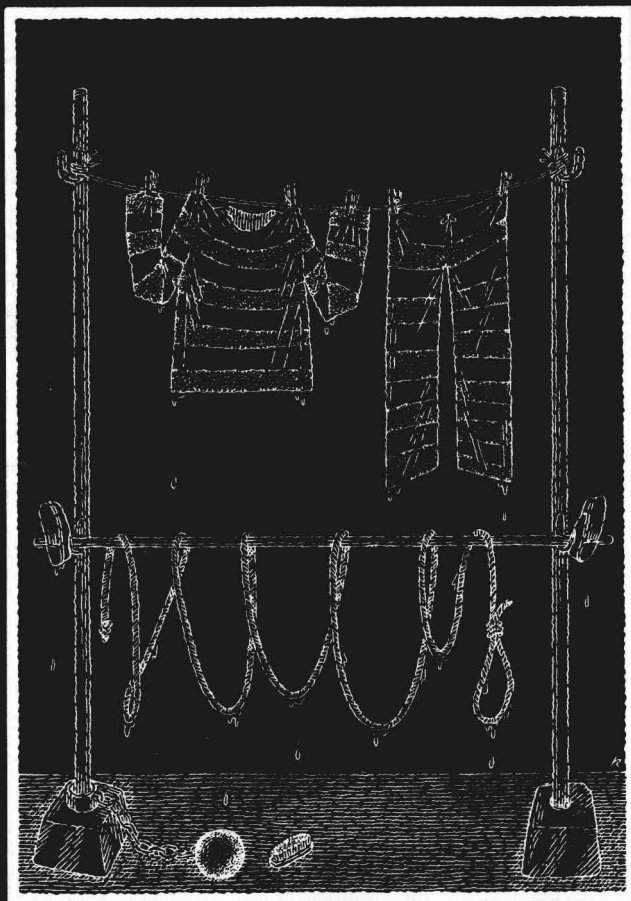


アラビヤ
ジョーク
大全

阿刀田高の



阿刀田高のブレスチックジョーク大全



阿刀田高のブラック・ジョーク大全

一九八〇年九月十八日 第一刷発行／一九八〇年十二月十八日 第三刷発行

著者—阿刀田高（あとうた・たかし）

装幀—ナメ川コイイチ

発行者—野間省一

発行所—株式会社講談社

東京都文京区音羽三—十二—二十一 郵便番号 一一二 電話 東京〇三（九四五）一一二—大代表 振替 東京八一三九三〇



印刷所—豊国印刷株式会社／千代田オフセット株式会社

製本所—株式会社大進堂

定価—八九〇円 落丁本・乱丁本はお取り替えます。

© Takashi Atoda 1980 Printed in Japan

0093-306917-2253 (0) (X2)

阿刀田高のブラック・ジョーク大全





阿刀田高のブラック・ジョーク大全 PART 1

公園で

男「あなたと結婚できないくらいなら、ボクは死んでしまおうよ」

女「本気でそう言うの？」

男「もちろん」

女「わかったわ。じゃあ、ぼつぼつ日取りを

決めて予約しておかなくちゃあね」

男「うれしい！ 式場を決めるんだね」

女「ううん。葬儀屋さんのほうよ」

薬屋で

客「胃の薬をくれないかな」

店主「消化不良ですか」

客「うん。胃がもたれてね。特別によく効く

やつを頼むよ」

店主「じゃあ、このトケルンになさいませ」

客「よく効くかね」

店主「ええ。それはもう、消化不良にはピタ

リです。このあいだなんか、これを飲んで

自分の胃袋を消化しちまった人がいるくら

いですから」

学校で

校長「みなさん。兄弟は仲よくしなければい

けませんよ」

生徒「でも、うちのお父さんはお医者さんだ

から、兄弟が仲よくすると世間の誤解を受
ける、だからやめようって、いつも言っ
てます」

校長「どうしてお医者さんは兄弟仲よくし

ちゃいけないんですか」

生徒「お父さんには弟が二人いてお坊さんと

お肉屋さんをやっているからです」

ロケーションで

監督「さあ、この岸の上から思いきり海に飛
び込んで」

女優「とんでもないわ。そんなことしたら、

死ぬか、大けがをするか……」

監督「いや、いや。心配ない。これが最後の

シーンだから」

教室で

女教師「89たす58たす91よ。どうしてこんな
簡単な計算ができないの？」

六年生「でも、ボク、気が散ってダメなんで
す」

女教師「黒板に数字をタテに書いてやってご
らんなさい」

六年生「タテに並べると余計に興奮してダメ
なんです」

女教師「あら、どうしてかしら？」

六年生「先生の裸は、きつとそのくらいのポ
ディ・サイズでしょ」

一等船室で

乗客「おい、船長。この船のトイレはどんな
っているんだ。汚水が溢れ出てるぞ」

船長「申し訳ありません。なんでしたら船賃
をお返ししてもよろしいのですが……」

乗客「金を返せばそれですむってものではあ
るまい」

船長「その通りでございます。ただ、その点
にご理解がいただけますと、あとのお話が
大変やりやすくなるものですから」

乗客「あとの話？」

船長「はい。船はいま沈みかけております」

酒場で

男A「どうもこのごろ夢見がよくないんだ。

イライラして困ってしまおうよ」

男B「実はオレもそうなんだ」

男A「アパートに帰ると、机の上にすばらし
いウィスキーのびんが載っている」

男B「うん、うん」

男A「しめた！　と、思って飛びつくと底に穴
があいてるんだ」

男B「オレの夢と正反対だな」

男A「おや、そうかい」

男B「うん。アパートに帰ると、椅子の上に
すばらしい美女がすわっているんだ」

男A「うん、うん」

男B「しめた！　と思って飛びつくと、底に穴があいてないんだ」

金網の前で

死刑囚「今度の日曜日に刑が執行されるらしい」

その妻「あら、そう。子どもたちを連れて見に来るわ」

死刑囚「バカなこと言うな！」

その妻「ひどい人。それでも、あなた、父親なの？」

死刑囚「……？」

その妻「日曜日くらい、たまには子どもたち

にめずらしいものを見せてくれたって、いいじゃないの」

洋裁店で

奥さま「このスーツ、とてもすてきな柄ね」

店主「はい。当店自信の品でございます」

奥さま「それにデザインもとってもいいし

……」

店主「はい。当店自信のデザインでございます」

奥さま「鏡はないかしら？」

店主「いえ、ございません。そこまでは当店といたしましても自信が持てませんので

……」

町角で

子ども「お母さん。まっ赤な手袋が落ちてい
るわ」

母親「あら、中身も入ってるわ」

オフィスで

男A「謎のパミューダ海域を知ってるか
い？」

男B「うん。女房の財布みたいなものさ。み
んな吸い込んで、いつの間にか消えてしま
うんだ」

町で

少年「お巡りさん。早く来てください。大変
です」

警官「どうした？」

少年「お母さんの留守中に、よそのおじさん
がお父さんとすごい喧嘩をしてるんです」

警官「どこで？」

少年「すぐそこです。早く……。ボクのお父
さんが殺されちゃう」

警官「なるほど。あれか？　すごい喧嘩だ

な。どっちがキミのお父さんなの？」

少年「ボク、わかんない。それが喧嘩の原因
なんです」

火葬場で

男A「キミが病院に見舞いに来てくれないって、奥さんさびしがってたらしいじゃないか」

男B「オーバーなんだよ、あいつは。最後はノイローゼ気味だったしね」

男A「冷たいんだなあ。ゴルフばかりやってたんだろう。気ちがいだからな、キミは」

男B「気ちがいはいひどいよ。ほんのたしなむ程度だよ」

男A「そうかねえ」

男B「うん。でも、キミがゴルフのことなんか言い出すものだから……」

男A「だから？」

男B「ちよつと、その……骨が焼きあがるまで、その練習場へつきあつてくれよ」

庭先で

母親「あら。ナイフなんか持ち出して……どうするの？」

少年「銀行ごっこをして遊ぶんだよ。ボクは銀行の人で、サブちゃんも、ミツちゃんも、ハナコも、みんな預ける人になるんだから」

母親「そう。でもどうして銀行ごっこにナイフがいるの？」

少年「だって血液銀行だもん」

警察で

女「先週の日曜日、知合いの家からトロロい
もをもらったんです」

警官「ほう？」

女「トロロ汁を作ろうと思ったんですけど、
おいもをおろす道具がありません」

警官「ほう？」

女「それで昼寝をしていた主人を起こしてデ
パートまで買いに行かせたんです」

警官「ほう？」

女「それっきり帰って来ません。どうしたも
のかと思って……」

警官「どうしたものがかって……千切りにして

食べてもおいしいですよ」

客間で

女A「おたくのご主人、趣味はなんですか？」

女B「それが大工仕事なの」

女A「まあ、それはいいわねえ。便利で」

女B「そうでもないわ。定年後はひまでしよ

う。庭椅子も本箱も飾り棚も踏み台も、必
要なものはみんなもう作っちゃったの。な

んだか張り合いをなくしてみたわ」

女A「あら、でも、まだいいものが一つ残っ
てると思うわ」

女B「なーに？」

女A「棺桶」

町のどこかで

男A「オレにだけ打ち明けてくれ。キミが青酸カリで無差別殺人をやった犯人なんだね」

男B「うん。後悔している」

男A「そうか。本当にわるいと思っているんだな」

男B「わるかった。せめての罪ほろぼしに……」

男A「罪ほろぼしにどうする？」

男B「コンドーム工場に忍び込んで……」

男A「コンドーム工場？」

男B「そう。針でコッソリ穴をあけて、今度

はせめて無差別出産を……」

教室で

先生「空恐ろしい、って、どういうことですか？」

生徒「はい、先生。飛行機事故のことです」

食卓で

夫「おい、メシはまだか」

妻「そうせかさないでよ。手は二本しかないんですからね」

夫「馬鹿を言うな。時計だって手は二本しかないけど、チャンと八時になってるんだ」

結婚披露宴で

来賓 A 「おめでとうございます」

花嫁 「ありがとうございます」

来賓 A 「もしお父さまが生きていらしたら、

この席でどんなにお喜びになったことやら

……」

花嫁 「本当に……」

来賓 B 「おめでとうございます」

花嫁 「ありがとうございます」

来賓 B 「もしお母さまがなくなっていたら、

草葉のかけでどんなにお喜びになった

ことやら……」

電車の中で

男 A 「奥さんの容態、よくないんだらう？」

男 B 「うん。いよいよ駄目だね」

男 A 「じゃあ来週の日曜日、ゴルフには行け

ないね」

男 B 「いや、大丈夫。最悪の場合でも、今度

の日曜日は友引きのはずだから……葬式は

ないよ」

寝室で

夫 「男と女と、どっちがスケベエかな」

妻 「そりゃ男よ」

夫「そうかなあ」

妻「そうよ。きまつてるわ。いつだって男は

アレをやりたがるじゃない」

夫「ウーン。しかし、男がやっているときは、

いつだって女もやっているんだからなあ」

画材屋で

客「額ぶちを一つくれないかな」

店主「はい、はい。どのくらいの大きさです

か」

客「十号くらいだ」

店主「油絵ですね」

客「いや。墨で書いたものだ」

店主「どのくらいのお値段のお品をお入れに

なるのですか」

客「そう。ざっと一億円以上」

店主「一億円以上ですか。たいへんなお値打

ち物ですねあ」

客「うん。息子がようよう医学部を卒業して

ね。卒業証書を飾るんだ」

改札口で

駅員「もし、もし、お客さん。待って」

乗客「はい、なんですか？」

駅員「なんですかじゃないでしょう。定期が

一カ月前に切れてるでしょ」

乗客「ご心配なく。ボクは旧暦でやっています

から」

PTAで

新聞社広告部で

母親A「うちの子ども、本当に困ってしまいますわ。まだ中学生のくせにピンク・レ

ディーが好きで好きでたまりませんの」

母親B「それ、なんですか？」

母親A「あら、ご存知ないんですか。今テレ

ビで人気のあるスターですわ」

母親B「テレビ・スターならまだようござい

ますわ。うちの子なんかまだ中学生のくせ

に……」

母親A「ええ……？」

母親B「セブン・スターが好きで好きでたま

りませんの」

男「すみません。新聞広告を出したいんですが……」

社員「はい、はい。どんな文案ですか」

男「来たれ、新しき受験生たち！ 本年度合

格実績↓東大千四百八十一名、早大二千四

百八十五名、慶大九百八十六名……」

社員「誇大広告はいけませんよ。どちらの子

備校ですか？」

男「予備校じゃありません。私どもの神社

では毎年合格祈願をやっておりますので

……」